

## 心理的ストレスを背景として咳・咽頭痛を訴えた胃食道逆流症（GERD）の一例

滋賀医科大学総合診療部 松原英俊、西山順滋、田中努、三ツ浪健一

臨床に於いて消化器症状のないGERDは診断困難である。一方消化器症状は患者の心理的ストレスにより大きく影響されていることが知られている。今回消化器症状が無い遷延性咳嗽と咽頭痛を主訴としたGERDがあり、さらに心理的背景が大きく影響したと考えられる一例を経験した。

症例:31才女性。9ヶ月前に結婚。1ヶ月前より続く咽頭異常感、咳嗽を主訴としてX年5月当科受診。くしゃみが一過性であったがその後夜間のどの苦しさ、咳が発作的にあるため近医受診。改善せず、その3日後に当科受診。当日耳鼻科では異常なく、初診日よりGERDを疑いラベプラゾール20mg、マルファ液30mlを投薬。マルファ液は咳嗽発作に有効であり、咳嗽症状、咽頭痛とも改善していった。経過中心理的ストレスにより胃液逆流を感じ、咳嗽発作が起こるのを自覚した。X+1年3月に再燃ありXP上副鼻腔炎を認め、加療により急速に改善した。その後も明らかな心理的ストレスにより軽度咳嗽が続いていた。X+1年10月には咳嗽発作がほとんど無くなり、このころより残業で帰宅の遅かった夫が早く帰宅するようになり夫婦仲も改善していた。その後2ヶ月で完全治癒した。

考察:心理的ストレスに関連した咳嗽発作がPPIなどの投薬で改善した。